

台湾との技術交流 2018

まちづくり・防災グループ グループ長 阿部 徹

1. はじめに

台湾には17の農田水利会（日本の土地改良区に相当）があり、台北市にその一つである七星農田水利会がある。リバーフロント研究所では、2001年に七星農田水利研究発展基金と「河川水辺環境の技術協力」について合意し、毎年相互訪問をしながら技術交流を続けてきた。

2. 台湾訪問

本年度は台湾經濟部水利署主催の国際シンポジウム開催に当たり、東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻の池内幸司教授の招聘依頼を受け、11月5日から10日にかけてリバーフロント研究所の阿部が同行し、台湾当局との意見交換や現場視察を行ったので報告する。

2-1 中央災害即応センター（11月5日）

中央災害即応センターの施設見学を行うとともに、国家消防署、減災国家科学技術センター、水災害減災センター、水利署の職員と災害対応・事前準備の機構について意見交換を行った。

2-2 北区水資源局（11月6日）

中庄調整池管理所において、北区水資源局、第10河川局、台北水管理局、社団法人社区大学全国促進会及びNPO組織の参加の下、池内教授による河川環境情報図作成に関する講演が行われ、その後、台湾において河川環境情報図を公的・私的パートナーシップによって開発する課題について討論した。

その後、石門ダムと関連施設の視察を行った。石門ダムは2004年に襲来した台風により集水区域に多数の崩壊地が発生し、大量の土砂が流入するようになったため、山腹保全を行うとともに、ダム表層水取水口の設置、排砂施設の建設、台風発生時の高濁度河川水の代替として平時に清水を貯留するための大漢溪の旧河道を活用した中庄調整池の建設が行われている。排砂施設については、発電用管路を改造して水力排砂管路を敷設するとともに、貯水池山を下流河道まで貫通する阿姆坪排砂トンネルを建設中であった。この排砂トンネルは平時には浚渫土をトンネル上部に設置した排砂管により排砂するとともにダンプトラックの運行により浚渫土を運搬し、洪水時には洪水とともに土砂をフラッシュさせる仕組みである。日本のダム再開発現場見学等が参考になったと説明があった。

2-3 第4河川局（11月7日）

2017年6月2日に発生した南投県信義郷の濁水溪和社溪隆華橋における豪雨災害について災害対応と復旧について現地視察を行った。

また、第4河川局と災害対応・事前準備の機構及び可能な災害対応の戦略について意見交換を行った。

2-4 水利署国際シンポジウム（11月8日）

本シンポジウムは、水利署が水管理の経験を分かち、台湾における水利産業技術を増進するために、ヨーロッパ、アメリカ、アジアから専門家を招聘し、基調講演、現地視察により彼らの知識や考えを交換するとともに、一連のイベントを通じて水利経験に寄与し、広く国際的な見地を探求し、水資源産業における持続可能な発展を支援することに役立てることを目的に開催された。

池内教授は「日本における水災害の防災対策～最大クラスの水災害への備え～」と題して講演を行い、他の5人の基調講演者とともにパネルディスカッションに参加した。

2-5 台湾農業工程学会研究会等（11月9日）

本研究会では、池内教授が昨日と同様の内容で講演を行った。

その後、場所を変えて、水利署の方々と意見交換を行った。阿部から日本のかわまちづくりについて紹介を行った。最後に、今回の日台交流の感想交換を行った。

3. おわりに

日本と台湾は災害を受ける環境が非常に似ており、地球の気候変動化において、日台の技術交流の重要性を強く感じたことを付し報告を終える。



写真-1 アム坪排砂トンネル模型視察



写真-2 水利署国際シンポジウム